

平成 30 年度

第 1 回草津市文化振興審議会 会議録

▼日時：

平成 30 年 7 月 5 日(木)10：00～12：00

▼場所：

草津市役所 2 階 特大会議室

▼出席委員：

木下委員、辻委員、中川委員、我孫子委員、五十川委員、伊庭委員、澤委員、田端委員、津屋委員、中寫委員、中村委員、綾委員、石田委員、田中委員

▼欠席委員：

梅山委員

▼事務局：

川那邊教育長、竹村部長、八杉専門理事、堀田副部長、相井課長、山本課長補佐、松岡主査、永井主任

▼傍聴者：

0 名

1. 開会

【教育長】

平成 30 年 3 月に草津市文化振興計画を策定し、今年度より計画に基づく取組をスタートさせました。関係機関、関係者との会合や、出前講座、職員プロジェクトチームなどを通じて、積極的に計画を周知しているところであり、様々な機関や関係部局等との連携の中で文化振興を推し進めていきたいと考えております。

5 月 13 日（日）には、草津市文化振興条例の施行、計画の策定を記念した文化振興フォーラムを開催しました。当日はあいにくの荒天でしたが、約 260 名の方にお越しいただき、文化の価値や潜在力について学ぶとともに、暮らしの豊かさや、ふるさとの誇りについて、お考えいただく契機としていただき、オール草津で、文化の薫り高い“出会い”と“交流”に満ちた活力と魅力にあふれるまちを築くための機運を醸成できたのではと思います。

5 月には日本遺産に、芦浦観音寺とサンヤレ踊りが追加認定されました。日本遺産は認定されると、認定された当該地域の認知度が高まるとともに、日本遺産を通じた様々な取組を行うことで、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化等にも貢献し、

ひいては地方創生に資するものであり、観光を始め様々な分野での活用が期待されます。

本年度の審議会では、部会を二つに分け、既存事業の見直しの検討や、文化振興計画に定める重点プロジェクトの検討に取り組んでいただきたいと考えております。皆様の日頃の活動や研究等で培われた経験やアイデアを頂戴したいと考えているので、よろしくお願ひします。

2. 委員の自己紹介

▼委員自己紹介

▼事務局自己紹介

3. 会長および副会長の選出

委員より事務局提案を求める声あり。

事務局が中川委員を会長に、辻委員を副会長に推薦し、一同了承。

▼会長、副会長挨拶

4. 今年度の取組予定

【事務局】

<資料に基づき説明>

5. 報告事項

- (1) 文化振興フォーラムの開催
- (2) 日本遺産の追加認定
- (3) アートフェスタくさつの開催

【事務局】

<資料に基づき説明>

【A委員】

報告事項等に関し、質問はないか。

【各委員】

特に質問なし

6. 審議事項

- (1) 各基本施策の成果指標／文化事業調査結果
- (2) 施策評価部会について
- (3) 重点プロジェクト検討部会について
- (4) 部会の割り振りについて

【事務局】

<資料に基づき説明>

【I委員】

評価部会が指定管理者の事業も含んだ内容となっており、全体を知っておられる澤委員が、重点プロジェクト部会のメンバーになっているが、評価部会の方がいいのでは。もしくは、逆に当事者がいない方がいいという配慮なのか。

【事務局】

重点プロジェクト部会の方をお願いしているのは、文化ホールを拠点とした事業を検討していきたいと考えていることから、現場の御意見を頂戴したいと考えている。評価部会の方にはオブザーバー参加等も検討させていただきたい。

【C委員】

これから草津の文化振興が本格的に始まっていくということで、期待をしている。お金の無駄遣いにならないように、きちんと評価すること、わかりやすく伝わりやすい重点プロジェクトを研究することから始めるのは良い。前回の委員会から時間があつたので、色々な地域の人に草津について聞いたが、草津の印象が他の街と比べるとどうしても薄い。その中で、草津の文化をどうアピールしたら良いかを密に考えていく必要がある。様々なレベルで検討していく必要があると考えるので、この審議会だけでなく、「草津だったらこれで押したほうが良い」などアイデアがあれば、特に重点プロジェクト部会員以外の方に、一言ずつでも教えてほしい。

【D委員】

事業調査結果について、「D」や「E」などの評価があるのはどうなのか。

【A委員】

「A」から「E」というのは評価ではなく、前年と比べ予算が増えた、減った、廃止したという客観的事実。それを評価するのがこちらの仕事。

【E委員】

資料6の最後に「文化的資産の継承および活用」とあり、H29の実績値は未集計と聞いていたが、H25からH28までは数字が出ており、予想していたよりは高いと思った。もう少し低いのでは、と文化財保護審議会でも言われていた。この審議会で議題にすることではないかも知れないが、「文化的資産の継承および活用」となると、博物館などがありそこで恒常的に催しが行われることが必要だと考えている。今後、皆さんと審議しながら、文化財保護審議会の方とも相互に意見を持ち寄りたい。

【F委員】

資料の数字を見るときに気になるのが、基準が変わると見え方が変わってしまうので、配慮が必要だということ。例えば、先ほどの事務局からの説明で、「学校等における文化活動の充実」について数字が上がったという話があり、文科省の調査で、基準を変えれば「いじめの認知件数」が跳ね上がったのと同じように、実態が変わらないのに数字が変わってしまうことがあるので、実態に注目する力を持つ必要がある。それは、これまでの取組を「A」「B」「C」で表すことについても、もう少し違う目で、盲目的に見ずに考えていかなければと思う。取組にバランスは大事だが、突破的なところも大事で、着地点を見出す必要がある。全てに配慮した結果、何も草津らしさがないというのは残念な結果になるので、見極めていく必要がある。

【G委員】

きっかけ事業として、地域創造の市民プロデューサー育成事業などがある。ホールとしても、市民企画を大事にしており、事業計画を立てている。草津は、市民プロデューサーがとても多い街だと思っている。元気なお母さん達が多く、才能がある方も多い。そういう方々と一緒に何かできればと思う。

【N委員】

基本施策の成果指標、具体的な数値を定めるやり方は新鮮。委員にならなければ分からなかった。「草津まちあかり」など、草津市にとって有意義なものは、財政が苦しいからできないではなく、力を入れて継続してほしい。琵琶湖に関する研究は、各方面に委託するなどして資料が分散していたが、15人の研究者が、寝ても覚めても琵琶湖のことばかりを考えることによって、ずいぶんと琵琶湖の研究が進むと言われた。街道交流館には、いつも草津宿について研究している学芸員の方がいらっしやり、ボランティアガイドとしても多方面でとても頼りにさせてもらっている。東海道も中山道も宿場はたくさんあるが、草津が交流していることを知らない人は多い。こんなに良い宿場があるので、街道文化について特色があるものをこれからも打ち出していくことができればと思う。

【M委員】

芦浦観音寺が春と秋に一般公開されるが、寺宝は全て美術館等に預かってもらっており、帰ってくるのを楽しみに来てくださる方がいる。もっと、何が帰ってくるかというのをPRできれば良いと思う。本陣と交流館では、最近は子供を対象にした色々な企画を推してく

ださっているの、子どもたちに草津をよく知ってもらうにはとても良い。立命館大学にある木瓜原遺跡のガイドを、小学校3年生にした時に、製鉄炉の説明をどのようにしたらいいのかすごく悩んだ。子どもは、鉄や窯と言ってもわからないので、イラストを描いたりすると興味を持ってくれた。記憶絵や民具で授業をするときも、草津宿内を歩いていてお地蔵さんがたくさんあるのを見ても、子ども達は目を輝かせている。そういう場所が草津にはたくさんある。

【L委員】

文化とはどういう意味なのかを改めて考えた。子どもの時から周りにある言葉だが、改めて、文化を振興するとはどういうことか。もしかすると、例えば文化という言葉何か別の言葉に言い換えて見せてあげると、入ってくる人がどっと増えるような気がしている。先ほど、文化は「デザイン」「暮らしの中にある」という言葉があり、とても共感できた。絵を見るとか、歌を歌うとか、ちょっと一歩特別なことをすることが文化、というだけではなくて、暮らしそのものがそうなのでは。それを意識できるようになって、楽しめるようになったら、全体の質が上がると思う。これからどんな風になるのか楽しみ。

【K委員】

美術協会での大きな課題は、展示する場所や、創作活動する場所の問題。前年度からこの審議会に参加する中で、暮らしの中で美術協会の会員が持っているものをどのように埋めていくか、広げていくかを考えている。今までは、場所を求めていくというのがあったが、逆に全員のものが揃わなくても、街の中で人々の潤いや安らぎのために何か我々の持っているものを活用してもらえないか。市域の中でもたくさんのブロンズ像が立っており、これほど多い地域は少ないと思う。ブロンズ像だけでなく、生活の中の潤い、絵画があるなど、我々の中でやっていけることではないかと考えている。コーディネートの一環として活用していただければ。

【J委員】

発信する側としてイベントを見せてもらっていて、発信してキャッチしてくれる人が、増えてはいると思うが同じ人ばかりである。今回のたくさんの行事も、対象が違うものもあるが、行く人はいつも行く。市民活動されている方も、すごく頑張られてされる方はいろんな場所で出会う、そうじゃない方は出会わない。どこの市もそうだと思うが、差があるように見えている。発信側としても同じメンバーであったが、今年度からは立命館大学の放送部の皆さんに草津を紹介してもらっている。立命館大学内にある木瓜原遺跡の新入生への紹介もあり、キャンパスでオンエアする音源と、えふえむ草津でオンエアする音源を、パッケージで全て学生に作ってもらい、同時に放送している。若い人が発信して、若い人に聞いてもらえるようにと挑戦している。他にも、色々な形で発信できるように考慮して、草津のイベントや文化を発信している。今までの色々な行事を踏まえて、どういう形でプレスに発信するかも草津市の課題かと思っている。

【I委員】

今回一番の特色は、文化振興計画の26ページから30ページのところだと感じている。特に重点プロジェクトで3つの柱を立てて、サブテーマの中に研究と展開が入っており、その検討部会まで持つという丁寧さがある。重点プロジェクトの検討部会として、プロジェクトチームが立ち上がるというのが、草津の始め方の最大の特徴となるのではないかと。13万人の文化プロジェクトの具体的なところについては、もう少し大きく捉えて、小さなところで福祉との連携とか、新しいところを部会の中で検討していかなければ、他ができていないことをやってきたと言えるようにする必要があるのでは。

【H委員】

資料7の32番、障害福祉課と連携している事業を見て、少し期待をした。ダイレクトに障害のある方を対象にした文化講座をやるという事業であるが、今年度について講座内容の充実を図るために内容や回数の見直しをおこなうと書いていた。今回こういう計画もできたので、障害福祉課がやっていくことは重点プロジェクトの中の13万人の文化プロジェクトにも直結していくところだから、これを機に充実させていこうという書き方になっているのではと期待する。また、課を横断した職員のプロジェクトチームもできるということなので、さらに重点プロジェクト検討部会でも話ができることを期待している。障害福祉課が担当する事業はこの1つだが、他の課がされる事業も少し工夫をしたら障害者や高齢者が参加しやすい場合もあると思うので、その観点で次回以降の部会も参加したいと思っている。

【B委員】

先ほど子どもたちとの昔の話が出ていたが、言葉だけではなく「視覚化」も重要なキーワード。視覚化されたものを作ることによって目標やイメージを抱き、何か変わっていくのでは。その中で、文化という難しい言葉ではなく、生活の方法や、豊かさなどといったものが盛り込めると良い。誰もが視覚を通してコミュニケーションを取れる。本来デザインは平面から入り、そこから商品の伝達といったやり取りが生まれる。最近ではコミュニケーションツールとして見直されてもいいのではと思っている。そのあたりがポイントかと。

【C委員】

草津は街道文化という話があった。街道は繋がっているが、各地域を見ると分断されている。草津でやるのが、他の街とも繋がっていくよう、そういう視点を皆さんの頭の中で持っておいていただけると嬉しい。

【A委員】

行政は、どれだけコストをかけたかの評価を得意とする。パフォーマンス評価、生産性の評価は、民間企業に一日の長がある。ここで議論をしないといけないものは、コストを削りながらパフォーマンスも上げてやっているけど、役に立っているのか、どういう役に立っているのか。次世代形成に役に立っているのか。企業は、利益率が指標になるが、行

政の場合は公益。公益とは、多くの価値がある。安全、平等、信頼の価値、細やかに言えば、市内の小学生の学力向上や、犯罪の減少、教養の上昇も公益。それをどうやって計るかという困難なことを、この審議会では基本計画を作る時に短期間でやってきた。ご苦労をおかけした。

資料の一番後ろに、草津市文化振興計画事業実績シートがある。これを事業カードと呼んでいるが、このカードを作らないままに議論している文化審議会などが多すぎる。それでは空中戦のような、総論的な委員会となってしまうので、それはやめようと言って作ってもらった。そんなことをやっている暇は草津にはない。県でも、県直轄の事業ばかり審議していたのをやめてもらい、県内の市町の実績も紹介してほしいなど注文をつけた。県と市町との連携を強化してほしいといった。県は最近、草津や近江八幡にも注目し始めたと思っている。具体的なフィールドで、事業をどのように展開していくかを考え始めたのが県の進歩だと思っている。それも全部、事業カードを作ることから始めた。

40年前に聞いた言葉で、「まちづくりには若者、ばか者、よそ者が欠かせない」というものがある。これは、若者はビジョン無き者は行動を起こせず、ばか者は具体的な実力、資源を把握していない者には実行力は無い。よそ者は、うぬぼれ者の世界には進歩がなく、外部の評価をもらわないといけない、という心理学の3点セット。街道のまちは、見事にこの3点が揃いやすい、有利な場所ではないか。元々よそ者が揃いやすい、風を運んでくる。草津が大好きなばか者がいる。一刻者という。あとは、若者。20代30代ではない。0歳から6歳。その頃から火をつけないといけない。ブックスタートならぬ、アートスタートと呼んでいるが、草津から起こせないか。高校生や、大学生も良いが、彼らは期限付きで出ていく。そのためには高齢者にちょっと遠慮してもらって、その資源を若者に向けられないか。そういう意味で、事業一覧を見たときに、高齢者中心になっていないか。方向転換できないか、という視点でみる必要がある。

また、アート自体は元々社会性を持つものではない。市場でも取引される。しかしアートそのものに、公共性は内部的に備わっている。時代や場所によってそれは変化する。文化に関する助成金は、格差を埋めていくものであって、むやみにお金を出すものではない。本当に、文化ホールが文化庁の助成金をもらって仕事をしようとするなら、普及啓発型で、何を開発するか、コンセプトを明確にしないと助成金は出ない。そういう時代が変わった。造形物も置けばいいものではなく、何か期待するものがあってのこと。

7. 閉会
